

乳幼児の精神発達と行動異常の 発現に関する継時的研究

子どもの気質とMOTHERINGについて

木村 三生夫(東海大学小児科)
比企野 典子(")
渥美 真理子(東海大学精神科)
氏家 武(")
森 敦子(")
平安 由紀子(")
福田 真也(")
山崎 晃資(")
牧田 清志(")

我々は、小児期におけるさまざまな精神障害の発現と授乳モードの関連についての調査研究を行ってきた。その結果、神経症的障害の発症と授乳モードの関連は見い出せなかったが、周生期障害および器質性障害などの子どもの側の因子と授乳モードの関連が明らかとなった。

これらの予備研究の結果をもとにして、本研究においては、新生児および乳幼児の精神運動発達経過を継時的に追跡調査し、気質特徴との関連から、発達過程にかかわるさまざまな因子の関連性を明らかにすることを試みている。そして精神発達過程における子どもの側の因子に注目し、新生児期において、どの程度まで気質特徴を具体的にとらえ得ることができ、その気質特徴がどのように変遷して行動異常の発現と関連していくのかを明らかにすることを試みている。

同時に、家族力動および両親の養育態度などについての調査も行ない、乳幼児の気質特徴と関連因子との間にどのような相互作用が働き、それが子どもの personality の形成にどのような影響を与えていくのかについての検討も試みたいと考えている。

対象と方法

対象は、東海大学病院で出生し、その後、継時的に健康診断を予定している200名の子どもとその母親とし、以下の項目についての行動観察、神

経学的検査およびアンケート調査を行なうこととしている。

1. 妊娠8~9か月時に、母親の出産に対する意識調査を行ない、あわせてY-G性格検査を施行する。

2. 生後1週間目に、Brazeltonの新生児行動評価を行なう。

3. 生後1か月、3か月、6か月、12か月の各健診時に、主に神経学的検査法によって、運動発達の評価を行ない、授乳モード、睡眠パターン、愛着行動などについての調査を行なう。また、生後3か月、6か月、12か月、1歳半の各健診時に、津守式精神発達質問紙を行ない、精神発達の評価を行なう。

4. 生後6か月の健診時に、CareyのInfant Temperament Questionnaireによる評価を施行し、1歳半または2歳児健診時には、CareyのToddler Temperament Scaleによる評価を施行する。

現在、母親100例に対するアンケート調査、新生児50例についての行動評価を行ない、研究継続中である。

以上の調査、研究の結果から、次のことがらについての考察を試みる予定である。

1. Brazeltonの新生児行動評価でとらえられた行動特徴を、CareyのTemperament Scaleから得られた結果と比較検討し、気質特徴、精神

運動発達レベルの恒常性や変化の様相をみていく。

2. 母親の性格および養育態度と、乳幼児の気質特徴との間にどのような関連が認められ、それが愛着行動の形成にどのような影響を与えて行くのかについて検討していく。

3. そして、乳幼児の精神運動発達過程における行動異常発現の様式についての考察をすすめた。

昭和58年度研究報告

本研究では、personalityの形成にとって重要な因子である気質の評価を目的として、新生児期から、乳幼児に対して気質調査も含めた継時的な精神発達についての調査を行ない、同時に両親の養育態度などの環境因子との関連についても考

察していくこととしている。

方法は、前述の研究計画の通りである。

昭和58年11月より調査を開始しており、現在、

- ①母親の出産に対する意識調査について152例、
- ②母親へのY-G性格テストについて82例、
- ③Brazeltonの新生児行動評価について93例、
- ④1か月健診時の神経学的検査について85例、
- ⑤3か月の精神発達検査について4例、⑥3か月育児アンケートについて4例、施行している。

Brazeltonの新生児行動評価については、予定の半数の実施をすでに終了しているが、その手技の複雑さ、評価の難しさから、現在、我々の検査施行での信頼性、妥当性を、そしてこの検査の位置づけを、検討中である。